

ソーシャル・エージェントは ユーザーの生の意味の感覚を減じるか

久木田水生 (Kukita)
名古屋大学

心理学や神経科学の知見によれば、社会的に価値があると思われる活動に従事していない人、孤立して疎外感を感じている状況にある人は自分の生に意味を感じることが難しい[1][2]。だとすると近年のAIの発展は多くの人々の生の意味の感覚にインパクトを与えるかもしれない。というのもAIは人々から仕事を奪い多くの「無用者階級」を生み出すかもしれず[3]、またソーシャル・エージェント（ユーザーと社会的なインタラクションをすることでユーザーを楽しませることを目的とする人工的エージェント）との疑似的な社会的関係が、人間同士の真正な社会的関係の構築を阻害してソーシャル・キャピタルを減少させることが懸念されている[4]からである。本発表では特に、AIの普及が社会的関係にどのような影響を与えうるかという点から生の意味の感覚へのインパクトを検討する。

[1] ポール・サガード著、無藤隆、松井由佳、松井愛奈訳、『脳科学革命——脳と人生の意味』、新曜社、2013年。

[2] 浦田悠、『人生の意味の心理学——実存的な問いを生むところ』、京都大学学術出版会、2013年。

[3] ユヴァル・ノア・ハラリ、『ホモ・デウス——テクノロジーとサピエンスの未来』、下巻、河出書房新社、柴田裕之訳、2018年。

[4] Joanna Bryson, ‘‘Robots should be slaves’’, Close Engagements with Artificial Companions: Key Social, Psychological, Ethical and Design Issue, Yorick Wilks (ed.), John Benjamins, chapter 11, 63-74, 2010.